

原坦山の『大乘起信論』観

— 『大乘起信論両訳勝義』標註の分析と『釈摩訶衍論』の重用 —

佐 藤 厚

一、問題の所在

原坦山（1819-1892）は幕末から明治半ばにかけて活動した曹洞宗僧侶で、初めて東京大学で仏教学を講じたほか、学士院会員にもなった人物である。原は『大乘起信論』（以下『起信論』）の学説に基づいた独自の仏教身体論を作り上げ自らも実践した。また、東京大学における『起信論』講義が明治の日本哲学の特徴である「現象即實在論」につながったとされている¹。

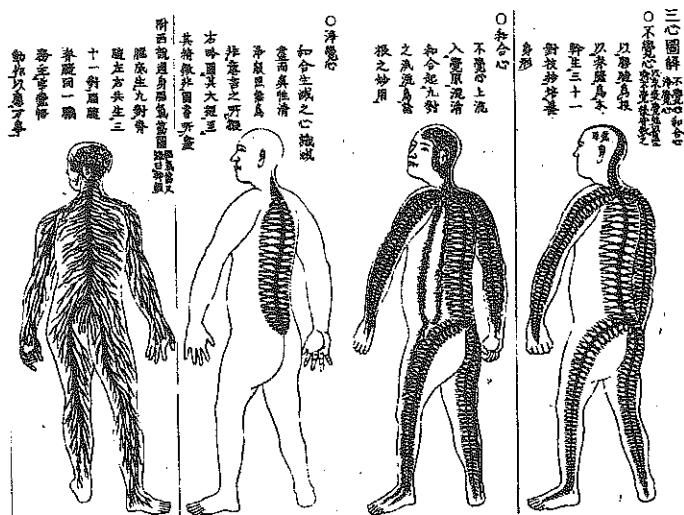
筆者は原に関心を持ち、最近では東京大学での講義について論文を書いた²。東京大学の講義においても『起信論』が大きな役割を果たしていることを知り、さらに原の『起信論』観を知りたいと思うようになった。

原の『起信論』観を知るための資料としては、原が『起信論』の旧訳（真諦訳）と新訳（実叉難陀訳）とを取捨し編纂した『大乘起信論両訳勝義』（明治 18 年）、およびこれに基づいた講義『大乘起信論両訳勝義講義』がある。本稿では『大乘起信論両訳勝義』に掲げられた標註に着目し、これを分析することにより原の『起信論』観を探る。

結論を先取りすれば、最も大きな特徴は、七世紀から八世紀にかけて中国、新羅で成立したと考えられ、日本では真言宗開祖・空海（774-835）により重視された『釈摩訶衍論』を用いて『起信論』を説明することであり、それは原

¹ 渡部清「仏教哲学者としての原坦山と「現象即實在論」との関係」（『上智大学哲学紀要』24、1998）

² 佐藤厚「原坦山の東京大学仏教学講義」（『駒沢大学仏教学部論集』54、2023 年）、佐藤厚「翻刻・『高嶺君遺稿』「印度哲学」原坦山の東京大学仏教学講義を知る糸口」（『中央学術研究所紀要』52、2023 年）



<図1> 「三心図解」(国会図書館デジタルコレクション³⁾)

の仏教身体論とも関連していた。

二、原坦山と『大乘起信論』

原がいつ『起信論』を学んだかはわからない。ただ当時の僧侶の教育の中で若いころに勉強したことは容易に推測できる。原が『起信論』を中心とした独自の仏教身体論に没入するきっかけは、江戸時代後期に30代半ばに京都で繰り広げられた蘭学医・小森宗との論争である。蘭学医である小森が、仏教でいうところの「心」はどこにあるのか説明したまえ、と質問したのに対して原はきちんと答えることができなかった。そこで原は発奮して蘭医学を学び、独特の仏教身体論を構築した。

代表的なものは三心図解として表現されるもので、三心とは不覺心、和合心、淨覺心をいう(図1参照)。不覺心は腰髄が根となり脊髄から三十一対の枝が分かれる身体を形成することをいう。和合心とは、不覺心が上流して頭部の覚

³ 原坦山 著『心性実験録：一名・西学弁解』, 浅倉久兵衛, 明6.9. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/833741> (参照 2023-11-27)

源に入り混淆して九対の流れを生み出し諸根の妙用となすことをいう。淨覺心とは和合生滅の心識が滅し尽くして真性清淨なることをいう。和合生滅を断ずるには坐禅による修行が必要であり、原はそのために何度か死にかけたという。

このように原の仏教学は机上のものではなく、人間の身体という最も具体的なもののうえに証拠を見つけていこうとするものであった。

60歳から始めた東京大学の講義でも『起信論』を講義した⁴。この時は法蔵『起信論義記』をテキストにしている。ただ、独自のテキストである『両訳勝義』は明治維新前の元治元年から作り始めたという。このほか明治3年、明治13年、明治18年に曹洞宗の要請で『起信論』を講義したという⁵。

三、『大乘起信論両訳勝義』標註の分析

前述したように、『大乘起信論両訳勝義』は元治元年（1864）から製作を始めたといい、明治18年（1885）には仏仙社版が刊行されている。本稿ではこれを底本として用いる。標註の最初には簡単な凡例のようなものとして、「釈 指釈摩訶衍論」「遠 指慧遠法師」「無書名人者自注也」とある。つまり釈とは『釈摩訶衍論』、遠は慧遠『大乘起信論義疏』、そして書名や人名のないのは原自身の注である。

以下、50の標註を整理する。

凡例を述べると次のような形式である。

①（丁数）対象語（対象語を含んだ原文）

・注釈（『典籍名』『原文』）

・典故（引用がある場合）

なお割注はカッコ内に示した

では以下に標註の内容を列举する。

⁴ 確実に『起信論』を講義したと思われるのが、明治12年、16年、18年である。13年、20年は推測である。佐藤厚「原坦山の東京大学仏教学講義」（『駒澤大学仏教学部論集』54、2023年）191頁

⁵ 柏木弘雄「大乘起信論を軸とした仏教研究の展望」（『駒澤大学仏教学部論集』22、1991年）39頁

①（二丁右）衆生心（法者衆生心）

〔注釈〕『釈頌』云、「衆謂四衍衆、生謂四種生。是一法界藏、遍於彼八處。衆有四種。云何為四。一者如來衆。二者一切菩薩衆。三者一切聲聞衆。四者一切緣覺衆。是名為四衆。生有四生。卵胎濕化。四衆攝諸聖、四生攝諸凡。」
〔出典〕龍樹造 筏提摩多訳『釈摩訶衍論』卷1（大正蔵 32・600c14-23）

②（二丁右左）真如相（此心真如相、即示大乘体故。）

〔注釈〕若具言之、則當言心之真体、如實之性。『大日經』所謂、「如實知自心名菩提」者是也。蓋其体曰真如、知之之智曰菩提。
〔出典〕善無畏、一行訳『大毘盧遮那成佛神變加持經』卷第1（大正蔵 18・1c）

③（二丁左）二門（依於一心、有二種門）

〔注釈〕『釈頌』云、「有七異一同、人法依行体、境界位異故、異名異義故（右頌七異）、云何為一同所謂遍同故。」（二之九丁）
〔出典〕『釈摩訶衍論』卷2（大正蔵 32・604c）

〔注釈〕又「南陽慧忠」云、「或名異体同、或名同体異、因茲濫矣。唯如菩提・涅槃・真如・仏性、名異体同。真心・妄心・仏智・世智、同名体異」（伝灯録）
〔出典〕道原『景德伝灯録』卷28（大正蔵 51・438c）

④（二丁左）各攝（此二種門、各攝一切法）

〔注釈〕『釈』云（二之十一丁）「各攝一切」法者、謂以真如門、攝一切法、無一一法、而非真如故。以生滅門、攝一切法、無一一法、而非生滅故。然真如門、不能攝生滅門一切諸法、又生滅門、不能攝真如門一切法故。所以者何。如是二門、皆悉平等各各別故。」
〔出典〕『釈摩訶衍論』卷第2（大正蔵 32・605a）

〔注釈〕『捷要』云、「一切法者、即十八界法、在真如門、攝一相一味、具名真空、以根性塵性、周徧法界、在生滅門、名三細六塵。」（註疏頭引之）
〔出典〕明正遠『起信論捷要』卷1（『卍統藏經』72・10b）

⑤（三丁右）若離妄念（若離妄念、即無一切境界之相）

〔注釈〕『遠疏』云、「是七識為心念也。」

〔出典〕慧遠『大乘起信論義疏』上之上（大正蔵 44・180b）

⑥（三丁右左）離心（離心攀緣、究竟平等。）

〔注釈〕「達磨」曰、「識心寂滅無一動念処、是名正觀。」（宗鏡録引之）

〔出典〕延寿『宗鏡録』卷 97（大正蔵 48・939b）

〔注釈〕『四十二章經』曰、「飯千億三世諸仏、不如飯一無念無住、無修無証之者。」

〔出典〕*現行の『四十二章經』（大正蔵 17）に見えず。覺岸『釈氏稽古略』卷四（大正蔵 49.0881b）に『四十二章經』云として引用するものと一致。

⑦（三丁右）真実空（復次真如者、依言說分別、有二種義。一真実空。究竟顯実故。）

〔注釈〕『釈』云、「一切染法總名為空、幻化差別、体相無実、作用非真故、名為空、而能隱覆法身如来実徳真体、是故名為如来之藏。」

〔出典〕『釈摩訶衍論』卷二（大正蔵 32・608bc）

⑧（三丁左）離妄（以離妄念心境界。唯証相應。）

〔注釈〕離念之功夫、謂之学道離了謂之証契、『永嘉』云、「唯証乃知難可測。」

〔出典〕玄覺『永嘉証道歌 / 附、無相大師行状』（大正蔵 48・395c）

⑨（三丁左）心生滅（心生滅門者、依如来藏。有生滅心。）

〔注釈〕『遠』云、「如来藏、是第八識也。有生滅心者、是第七識也。此言依者、同時相依。如影依形。此三句妄有所以。」

〔出典〕慧遠『大乘起信論義疏』上之下（大正蔵 44・182b）

⑩（四丁右）不生（不生滅与生滅、和合。非一非異。名阿頼耶識。）

〔注釈〕釈云、「五有為法（根本無明生住異滅）能熏四種無為法（真如本覺始覺虚空）及一切界心所熏五法（四無為一法界）随来而与五能熏（有為）共会和合同時俱転是故、説言不生云云。」

〔出典〕『釈摩訶衍論』卷第二（大正蔵 32・610bc）

〔注釈〕又『再校心識論』（四丁之左）「譬真心如水無明如塵和名濁水也。」当知、凡聖迷悟、皆是一念之階差、且和合識之義、非淺智之所知。

〔出典〕原坦山『再校心識論』（全集本・89頁）

⑪（四丁右）離念（離念相者。等虚空界。）

〔注釈〕釈云（三之六丁）、「遠離大無明念故言離念、遠離四種無常之相故言離相。」

〔出典〕『釈摩訶衍論』卷第三（大正蔵 32・615ab）

⑫（四丁右）等虚空（離念相者。等虚空界。）

〔注釈〕釈云（三之五丁左）、「性虚空理有十種義、一者無障礙義、諸色法中無障礙故、二者周徧義無所不至故、三者平等義、無簡擇故、四者廣大義、無分際故、五者無相義、絕色相故、六者清淨義、無塵累故、七者不動義、無成壞故、八者有空義、滅有量故、九者空空義、離空着故、十者無得義、不能執故、如是義用差別、若拋其体、無別而已、此虚空理二種淨智親所内証。」

〔出典〕『釈摩訶衍論』卷第3（大正蔵 32・615a）

⑬（四丁右）如凡夫人（如凡夫人、前念起惡。）

〔注釈〕『釈』云（三之十二丁）「滅相有二、起業相、業繫苦相、受苦滅無量善品故」。今此人覺滅相。

〔出典〕『釈摩訶衍論』卷第3（大正蔵 32・617a）

⑭（四丁右）如二乘（如二乘人及初業菩薩）

〔注釈〕釈云、「異相有二、執取相、計名字相、緣無量別相執着故」

〔出典〕『釈摩訶衍論』卷3（大正蔵 32・617a）

⑮（四丁右左）如法身（如法身菩薩、覺念無念。）

〔注釈〕釈云、「住相有四、轉相、現相、智相、相續相、住持心識、色相薰習故、」一念無量之差路、学道之明鑑。

〔出典〕『釈摩訶衍論』卷3（大正蔵 32・616c）

⑩（四丁左）如菩薩（如菩薩尽地。満足方便）

〔注釈〕 釈云（三之十一丁）、「根本無明薫本覺時、生三種相、故名生相（即初相）、一者独力業相（取無明之業）、二者独力随相（取本覺之用）、三者俱合動相。生相之称取初相故。」見性成仏之本義、『心識論』之末章、合看
〔出典〕『釈摩訶衍論』卷3（大正蔵 32・600c）

⑪（五右）如海水（如海水因風波動、而水非動性。）

〔注釈〕 大凡以動主静義論、則以風水喩為是是（如楞伽經此論）。
〔出典〕 求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝經』卷1（大正蔵 16・484ab）
〔出典〕 菩提流支訳『入楞伽經』卷1（大正蔵 16・515a）
〔出典〕 実叉難陀訳『大乘入楞伽經』卷2（大正蔵 16・594b）

〔注釈〕 以清濁義論、則以塵水喩為優（如楞嚴円覺）。

〔出典〕 般刺蜜帝訳『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經』卷5（大正蔵 19・126a）
〔出典〕 佛陀多羅訳『大方広円覺修多羅了義經』（大正蔵 17・913b）

〔注釈〕 以結解言、則如豆腐喩（心識論）。

〔出典〕『再校心識論』（全集本・89頁）

〔注釈〕『釈』云（三之二十四丁）、「本覺真心、体性清浄、相用自在、而不守自性、故随無明之縁作種種相」

〔出典〕『釈摩訶衍論』卷三（大正蔵 32・600c14-23）

⑫（五丁左）不覺（不覺義者、謂不如実知真如法一。）

〔注釈〕『釈』云、「根本不覺何因縁故得起而有。因不如故得起而有。何等法中而不如耶。謂三法中、而不如故。言不如者。当有何義。法。一者実知一法。二者真如一法。三者一心一法。是名為三。実知法者。謂一切覺則能達智。真如法者。謂平等理。則所達境。一心法者。謂一法界則所依体。」
〔出典〕『釈摩訶衍論』卷第4（大正蔵 32・625b）

〔注釈〕又云(四之十一丁)、「根本無明」、「如何能動心体能起諸念、此処難了、十地非境、三賢不量、唯仏窮了不可妄說、然依經說、強稱但云不覺。」

〔出典〕『釈摩訶衍論』卷第4(大正蔵32・626a)

〔注釈〕坦山曰、古仏猶如此。所謂知法者、畏故恐謬人、故不妄說之、而經論師、胡說亂註、瞎禪之徒、狂談漫語、自誤誤人悲。夫蓋不覺者、色質蘊形之原酷也、如別処論。(『心識論』、『実験録』)

⑩(五丁左) 迷人(猶如迷人依方故迷。)

〔注釈〕今就所知辺、說釈約心体論、当体究生処。

⑪(六丁右) 境界(離見則無境界。)

〔注釈〕『釈』云、(四之十三丁)「末那識。末那十一種者、根本無明、業相、轉相、現相、智相、相續相、業識、轉識、現識、智識、相續識、即是意識、微細分位、無別体耳。」

〔出典〕『釈摩訶衍論』卷第4(大正蔵32・629b)

〔注釈〕又說末那十一種異名、予別有図解『心性実験録』

〔出典〕原坦山『心性実験録』(全集本・108-109頁)

⑫(六丁右) 当知(当知無明、能生一切染法。)

〔注釈〕『釈』云、「譬如種子、唯一出無量辺花菓枝葉茅一切類。」

〔出典〕『釈摩訶衍論』卷第4(大正蔵32・628b)

⑬(六丁左) 復次(復次生滅因縁者、所謂衆生。)

〔注釈〕『釈』云、「舉本覺及与無明望於三識、本覺為因無明為縁、望於三相無明為因本覺為縁、以由親為因由疎為縁故。」

〔出典〕『釈摩訶衍論』卷第4(大正蔵32・629c)

⑭(六丁左) 此意(此意復有五種名。一名業識。)

〔注釈〕『釈』云(四之廿三丁)、「意有二義、一者根義、能生故、二者身義、依止故。」

〔出典〕『釈摩訶衍論』卷第4（大正蔵 32・629c）

〔注釈〕又『釈』云（四之廿二丁）、相識兩字差別大異、一者神解義、掘本覺流轉邊故、二者關鍵義、掘無明流轉邊故、依初門故、建立識名、依後門故、趣立相名。」

〔出典〕『釈摩訶衍論』卷第4（大正蔵 32・629c）

㉔（六丁左）坦山

〔注釈〕無明、心識二論、宜参考且思學道之不容易

㉕（七丁左）不相応（以不達一法界故不相応。忽然念起。名為無明。）

〔注釈〕『釈』云、（四之三十丁）「心念法異故、念法之依染、心品之依淨、如是二依各各差別病如水火而已。」

〔出典〕『釈摩訶衍論』卷第4（大正蔵 32・632a）

㉖（七丁左）須詳悉滅處。

㉗（八丁右）相応（相応義者、心念法異。依染淨差別。）

〔注釈〕『釈』云、「微細生滅、与三位本識、而不相応、僞重生滅、与分別事識、而共相応

〔出典〕『釈摩訶衍論』卷第5（大正蔵 32・632b）

〔注釈〕相応者、所作行業相、応俱轉之義

㉘（八丁右）不相応者（不相応義者。即心不覺。）

〔注釈〕心体和合之惑、本生死之原因。

㉙（八丁左）無明滅（無明滅故。動相即滅。非心体滅。）

〔注釈〕大凡滅有三相、曰止滅轉。止者止息動相也。滅者動相斷滅也。轉者轉却向外也。

- ⑩ (十一丁左) 復次 (復次染熏習。從無始來不斷。)

[注釈] 『釈』云、「此下分明顯示生滅門中三種大義。」

[出典] 『釈摩訶衍論』卷第6 (大正蔵 32・639c)

[注釈] 坦山曰、是雖祖釈、未可全拋、抑真如之體大、即是生滅滅已之三大耳、何則前説、(釈之二之二十四丁)「生滅不生滅、共以非有為非無為、本法為通所依體故。」

[出典] 『釈摩訶衍論』卷第2 (大正蔵 32・609b)

- ⑪ (十一丁左) 大智慧 (大智慧光明義)

[注釈] 『釈』云、「除無明之闇夜。」

[出典] 『釈摩訶衍論』卷第6 (大正蔵 32・640c)

- ⑫ (十一丁左) 徧照 (徧照法界義)

[注釈] 『釈』云、「照達一法界之源。」

[出典] 『釈摩訶衍論』卷第6 (大正蔵 32・640c)

- ⑬ (十一丁左) 真實 (真實識知義 * 坦山のテキストでは如實了知義)

[注釈] 『釈』云、「離虚仮妄想之解量。」

[出典] 『釈摩訶衍論』卷第6 (大正蔵 32・640c)

- ⑭ (十一丁左) 自性 (自性清淨心義 * 坦山のテキストでは本性清淨心義)

[注釈] 『釈』云、「自然本有遠離塵累。」

[出典] 『釈摩訶衍論』卷第6 (大正蔵 32・641a)

- ⑮ (十一丁左) 常樂 (常樂我淨義)

[注釈] 『釈』云、「無始來遠離塵累。」

[出典] 『釈摩訶衍論』卷第6 (大正蔵 32・641a)

- ⑯ (十一丁左) 清涼 (清涼不變自在義。 * 坦山のテキストでは寂靜不變自在義)

[注釈] 『釈』云、「如明鏡之南北相具隨違。」

[出典] 『釈摩訶衍論』卷第6 (大正蔵 32・641a)

- ③7 (十二丁右) 分別（離分別相。無二性故。）
 [注釈] 分則者、六七識之分際。『永嘉』云、「分別亦非慧。」
 [出典] 玄覺『永嘉証道歌 / 附、無相大師行狀』（大正蔵 48・397a）
- ③8 (十二丁右)
 [注釈] 方是參學之至要。當知、仏祖有自受用之生涯。
- ③9 (十二丁左)
 [注釈] 三身之本義、可見究。
- ④0 (十二丁左) 初發心（從初發心乃至菩薩究竟地。）
 [注釈] 『釈』云、「從解乃至金剛一切菩薩。明了通達。依正無分際故。」
 [出典] 『釈摩訶衍論』卷第 6（大正蔵 32・644a）
- ④1 (十三丁左) 答（答。以法身是色實體故。能現種種色。）
 [注釈] 『釈』云、(六之十七丁)「以智攝色、無一一色而非智故、說名智身、以色性即智故說名法身故。」
 [出典] 『釈摩訶衍論』卷第 6（大正蔵 32・644c）
- ④2 (十四丁右)
 [注釈] 不動之心體起念現苦是非凡夫二乘及初位菩薩之所能知。
- ④3 (十五丁左) 法我見（法我見者。以二乘鈍根。）
 [注釈] 是非特學道之大要學道之大要而已、即是如來廣大甚深、諸法實相、諸仏出世之本懷、莫等閑看、過諸注雖採。
- ④4 (十五丁左) 離念等（皆為離念歸於真如。）
 [注釈] 離念等語初業菩薩當貼在額上。
- ④5 (十六丁右) 千劫（修行諸行。經十千劫。信心成就。）
 [注釈] 百丈曰、「劫者滯也、亦住也。」
 [出典] 未檢。『撫州曹山元証禪師語録』（大正蔵 47・530a）が曹山の言葉

として「劫者滯也」を出す。

[注釈] 李通玄曰、「立時劫者、衆生之情塵也。」

[出典] 李通玄『新華嚴經論』卷1 (大正藏 36・727b)

[注釈] 又曰、「心緣劫量見障何休、諸仏法明本非時撰、計時立劫非是仏乘。」

(二乙十一丁右)

[出典] 李通玄『新華嚴經論』卷2 (大正藏 36・730a)

[注釈] 「当知衆生之情滯、豈特三万百万哉。」

[注釈] 『釈論』引十五契經異説、自刹那至三大阿僧祇劫、謂衆生心無量無
辺各差別故隨其心品説信行相如是不同今此文、且依本業釈解。

[出典] 『釈摩訶衍論』卷第7 (大正藏 32・648a)

④⑥ (十八丁左)

[注釈] 微細起滅之心相、祖門後來名流注識、是學道末後之牢關也、拔其根、
豈不難乎。

④⑦ (二十一丁左) 或現 (或現天形、菩薩形、如来形、相好具足)

[注釈] 大凡形相之現、非真仏、真仏現於心中、是非見仏者、不足与語也。

④⑧ (二十二丁右)

[注釈] 今世流布之禪、不為外道之眷屬者、有耶無耶。

④⑨ (二十四丁右) 他方仏土 (謂以專意念仏因縁、隨願得生他方仏土。)

[注釈] 李通玄曰、「機未成、則求淨刹於他方、根已熟、則顯法身於自性。」

[出典] 未檢

④⑩ (二十四丁左)

[注釈] 馬鳴大士起信論。梵莢已亡僅存二訳、亦有異同故、対觀會取於兩
訳之勝義。未曾削添一字一矣。原坦山識。

四、分析

以上、五十箇所をの標註を整理した。続いて分析に入る。まず全体としての注釈の分布を見る。すなわち標註は完全な語句の注釈ではないため、ある部分では注釈が多く、ある部分は注釈が少ないというように、注釈に濃淡がある。それを見ることにより、どこに力点が置かれているかを確認する。

そのためにまず起信論の五分（名称は原独自のものもある）と注釈の数を記す。

- 一 因縁分 (0)
- 二 立義分 (1)
- 三 解積分 (43)
 - ・・a 顕示実義 (39)
 - ・・b 対治邪執 (2)
 - ・・c 分別修行正道相 (2)
- 四 修行信心分 (2)
- 五 勸修利益分 (1)

これをみると注釈が集中しているのは解積分>顕示実義の部分であることがわかる。さらにこの中でも集中しているのは、覚・不覚の部分で、とくに不覚の部分が多い。これは後に原の仏教理論とも関連するが、煩惱の発生などに関心があり、それが反映したものと考えられる。

続いて標註自体に入る。標註は、大きく一、經典の引用を行わずに語句の説明をおこなうものと、二、經典を引用して説明するものとに分かれる。まずは後者について見る。

(一) 引用を伴わない注釈

まず全体にわたるものとして⑤〇「馬鳴大士の起信論、梵莢己に亡び僅か二訳のみを存す。亦た異同有るが故に、両訳の勝義を対観、会取す。未だ曾て一字たりとも削添せず。原坦山識す。」がある。これは、原の両訳勝義を制作するにあたっての編集方針を説明したものである。

以下、番号が若い順から挙げる。

<表1> 『大乘起信論両訳勝義』中、引用を伴う注釈

	作者・訳者など『典籍名』	回数
1	馬鳴造・龍樹釈・筏提摩多訳『釈摩訶衍論』	30
2	慧遠『大乘起信論義疏』	2
3	玄覺『証道歌』	2
4	李通玄『新華嚴經論』	2
5	善無畏・一行訳『大日経』	1
6	迦葉摩騰・法蘭訳『四十二章経』	1
7	『楞伽経』	1
8	『楞嚴経』	1
9	『円覚経』	1
11	道原『景德伝灯録』	1
12	正遠『起信論捷要』	1
13	延寿『宗鏡録』	1
14	原坦山『無明論』	1
15	原坦山『心識論』	1
16	原坦山『心性実験録』	1
17	不明1・李通玄	1
18	不明2・百丈云	1

㉔ (七丁左)「須らく悉滅処を詳にすべし。」これは染心の六種である、①執相応染、②不断相応染、③分別智相応染、④現色相応染、⑤見心相応染、⑥根本業相応染の部分で説かれる。

㉕ (十二丁右)「方に是れ参学の至要なり。当に知るべし、仏祖に自受用之生涯有り。」これは「心性無見、則無不見」に対する見解である。

㉖ (十二丁左)「三身の本義、見究むべし。」これは原文「凡夫二乗心所見者、名爲化身」に対する見解である。

㉗ (十四丁右)「不動の心体、念を起して苦を現ず。是れ凡夫二乗、及び初位の菩薩の能く知る所に非ず。」これは原文「心実不動」に対する見解である。

㉘「今世流布之禅、不爲外道之眷属者、有耶無耶。」これは原文「応知外道所有三昧。皆不離見愛我慢。貪着世間名利」に対する見解で、当時の禅の在り方を批判したもの。

(二) 引用を伴う注釈

続いて引用を伴う注釈を述べる。引用された典籍を回数順に整理すると<表1>のようである。

引用文献は18である。最も多いのが『釈摩訶衍論』で30回である。続いて慧遠『大乘起信論義疏』、玄覺『証道歌』、李通玄『新華嚴經論』が2回ずつである。また、善無畏・一行訳『大日経』、『楞伽経』、『楞嚴経』、『円覚経』、道原『景德伝灯録』、正遠『起信論捷要』、延寿『宗鏡録』、原坦山『無明論』、『心識論』、『心性実験録』が1回ずつである。

これらの文献は思想内容から次のように分類できる。

- 一、『起信論』注釈：『釈摩訶衍論』、慧遠『大乘起信論義疏』、正遠『起信論捷要』
- 二、禅文献：道原『景德伝灯録』、延寿『宗鏡録』、玄覺『証道歌』
- 三、華嚴文献：李通玄『新華嚴經論』
- 四、経典：『大日経』、『四十二章経』、『楞伽経』、『楞嚴経』、『円覚経』
- 五、原の著作：『心識論』、同『心性実験録』
- 六、不明

以下、それぞれについて見ていく。

一、『起信論』注釈

『起信論』注釈は、『釈摩訶衍論』、慧遠『大乘起信論義疏』、正遠『起信論捷要』の三つである。

(一)『釈摩訶衍論』

まず『釈摩訶衍論』を検討する。『釈摩訶衍論』の引用は29語と一番多い。引用される部分も次頁の<表2>にあるように、巻1から巻7までの広範囲にわたる。これが本注釈の最大の特徴といえる。

なぜ原は『釈論』を重視したのであるだろうか。これを考える前に、逆に、なぜ東京大学講義などでテキストとして使った法蔵『大乘起信論義記』は使わなかったのか。

『大乘起信論両訳勝義講義』⁶（以下『両訳勝義講義』）を見ると、原が法蔵『義記』を好まなかったという記述がある。

⁶ 『大乘起信論両訳勝義講義』10頁

<表2> 『釈論』を引用する標註と、該当『釈論』の巻

	(丁数) 対象語	釈論巻
1	① (二丁右) 衆生心	巻1
2	③ (二丁左) 二門	巻2
3	④ (二丁左) 各撰	同上
4	⑦ (三丁右) 眞実空	同上
5	⑩ (四丁右) 不生	同上
6	⑪ (四丁右) 離念	巻3
7	⑫ (四丁右) 等虚空	同上
8	⑬ (四丁右) 如凡夫人	同上
9	⑭ (四丁右) 如二乗	同上
10	⑮ (四丁右左) 如法身	同上
11	⑯ (四丁左) 如菩薩	同上
12	⑰ (五右) 如海水	同上
13	⑱ (五丁左) 不覺	巻4
14	⑳ (六丁右) 境界	同上
15	㉑ (六丁右) 当知	同上
16	㉒ (六丁左) 復次	同上
17	㉓ (六丁左) 此意	同上
18	㉔ (七丁左) 不相応	同上
19	㉕ (八丁右) 相応	巻5
20	㉖ (十一丁左) 復次	巻2
21	同上	巻6
22	㉗ (十一丁左) 大智慧	同上
23	㉘ (十一丁左) 徧照	同上
24	㉙ (十一丁左) 眞実	同上
25	㉚ (十一丁左) 自性	同上
26	㉛ (十一丁左) 常樂	同上
27	㉜ (十一丁左) 清涼	同上
28	㉝ (十二丁左) 初發心	同上
29	㉞ (十三丁左) 答	同上
30	㉟ (十六丁右) 千劫	巻7

私も此の大乘起信論を幾度も講じました。皆な旧訳が多かった。法蔵大師の義記でもやりました。それは頼まれてするのですからいやとも云へませんが実は余りややこしすぎて困まる。

つまり原は、法蔵『義記』を「余りややこしすぎる」ものと評価していた。ただ、それでも使ったのは、伝統的に起信論の勉強をする際に参考にするものが

法蔵『義記』だったからであろう⁷。

このように法蔵『義記』を使わない理由はわかった。ではなぜ『釈論』が解釈の中心となったのか。これも『両訳勝義講義』にヒントがあった。『起信論』の「不覚義者、謂不如実知真如法一故」を解説する中で、例の仏教身体論に触れる。

「不覚心起而有其念」、これは私が縷々申します、脊髓液体が昇流して脳中の知覚と和合しまして始めて念と云ふものが動き出すのです。そう云ふことを能く知て、早く此の流れを止める工夫をしますと、仮令へ仏陀に迄ならずとも彼の観音様位にはなれる。⁸

として脊髓と脳との間の煩惱の通路を遮断することを説いている。続いて釈論に言及する。

此の論主馬鳴菩薩又此論を釈された龍樹大師等は皆彼の仲間です。それ故に釈摩訶衍論には他に比して大部此の不覚の義を能く弁じてあります。彼時代には未だ今日の如く世界の学術も開けてみませんから脊髓脳髓の話も詳かならぬのでありますからそれは申されてないが、釈論には不覚の物体に就て論じてある辺が多く、此起信論は所知の辺に就きまして論じられてある。漫に名義でなく皆な実際の義が何がはれます。⁹

このように原は釈論が、自分の考える身体論を補強するものと見ていることがわかる。これを具体的な教理としては、心源の展開である「俱合動相」として説いている部分を挙げる。

これは今より二千年前彼神経細胞の名も調もない時分、此の心源中の俱合動相と云ふものを早く已に実験説明されてあるのが彼龍樹の釈論である。

⁷ これに関連して柏木は、原自身はテキストも『両訳勝義』という自分で納得したテキストを作って講義したはずである。「しかし、おそらく、駒込の曹洞宗関係の学校の先生がたからは、賢首大師の『義記』の解釈を通して起信論をもっときちんとやってくれと頼まれたのだらうと思います。」と述べている。柏木前掲論文 39 頁。

⁸ 同前 54 頁

⁹ 同前 56 頁

此の動相と称するものが即ち無明である。又之を動識とも業相とも名けてある。而して此の動相は何から成ると云ふに、独力業相と独力随相の二から成るとある。¹⁰

この部分を『釈論』で見してみる。まず「根本無明、本覚に熏ずる時、三種相を生ず。故に生相と名く。」として、独力業相、独力随相、俱合動相の三種を挙げる。これをそれぞれ次のような定義とともに示す¹¹。

- 一には独力業相・・・無明の体を取るにあらず。無明の業を取るが故に。
- 二には独力随相・・・本覚の体を取るにあらず。本覚の用を取るが故に。
- 三には俱合動相・・・和合動相を取る。

原が『釈論』を重視したのは、その仏教人体理論を後押しするものと見たためであった。真言宗でもない原が、このように『釈論』を重用しているということは、『釈論』自体の流通の歴史から見ても極めて稀有なことであると言わざるを得ない。

(二) 慧遠『大乘起信論義疏』

慧遠『大乘起信論義疏』は、二か所に引用される。一つは⑤「若離妄念」についてで、「是の七識を心念と為すなり。」慧遠『大乘起信論義疏』上之上が引用される。もう一つは⑨心生滅（心生滅門者、依如来藏。有生滅心。）で『遠』云、「如来藏とは是れ第八識なり。生滅心有らば、是れ第七識なり。此れ依と言うは、同時に相依す。影の形に依るが如し。此の三句、妄有の所以。」とある。

(三) 正遠『起信論捷要』

明代正遠『捷要』は一つ引用される。④（二丁左）各摂についての説明で、「一切法とは即ち十八界法。真如門に在ては、一相一味を摂するを具さに真空と名く。根性塵性を以て法界に周徧す。生滅門に在ては三細六塵と名く。」とある。ただ、疑問なのは『起信論』の注釈としては有名でもない本書がなぜ引用されたかである。標註に「註疏頭引之」とあるのがヒントになるか。

¹⁰ 同前 57 頁

¹¹ 『釈摩訶衍論』巻三（大正蔵 32・616 下）

二、禪文献

（一）道原『景德伝灯録』

まず道原『景德伝灯録』は一か所引用される。「依於一心法、二種門」の二種門に関し、名と体との異同についての部分である。又た「南陽慧忠」云く、「或は名は異なり体は同ず。或は名は同ずるも体は異なる。因茲濫矣。唯だ菩提、涅槃、真如、仏性の如きは名は異なれども体は同じ。真心、妄心、仏智、世智は、同名なれども体異なれり。」（伝灯録）

（二）延寿『宗鏡録』

続いて延寿『宗鏡録』は一か所引用される。⑥（三丁右左）離心（離心攀縁、究竟平等）で、「達磨曰く、識心寂滅して一として動念の処無し、是れを正観と名く。」として『宗鏡録』引用とする。『宗鏡録』巻97（大正蔵48・939b）を引用する。『少室六門』（大正蔵48・370中）に同文がある。

（三）玄覺『証道歌』

玄覺『証道歌』は二か所引用される。第一には⑧（三丁左）離妄（以離妄念心境界。唯証相応。）で、最初に「離念之功夫、謂之学道離了謂之証契」と述べた後、『永嘉』云、「唯証乃知難可測。」と述べる。これは（大正蔵48・395c）である。第二には⑦（十二丁右）分別（離分別相。無二性故。）の解釈で、最初に「分則者、六七識之分際。」と述べた後、『永嘉』云、「分別亦非慧。」とする。これは（大正蔵48・397a）である。

三、華嚴文献：李通玄『新華嚴經論』

李通玄の引用は、④千劫（修行諸行。經十千劫。信心成就。）に関するものである。これは修行の時間について、それが衆生の錯覚によるものであることを述べている。第一には「時劫を立つるは、衆生の情塵なり」。が引用される。これは『新華嚴經論』巻1（大正蔵36・727b）である。続いて「心縁劫量、見障何休。諸仏の法明は本より時の撰にあらず。時を計りて劫を立つつは是れ仏乘にあらず。」が引用される。これは『新華嚴經論』巻2（大正蔵36・730a）である。

四、經典

(一)『大日經』

『大日經』は②真如相（此心真如相即示大乘体故）の注釈で引用される。「若し具さに之を言はば、則ち心の真体、如実の性と言うべし」。として、「心真如」を「心の真体、如実の性」に開いて解釈する。次いで『大日經』の「如実知心、名菩提」を引用する。これは巻第1（大正蔵 18・1c）に出る。

(二)『四十二章經』

『四十二章經』は⑥に引用され、「千億の三世諸仏に飯すは、一無念無住、無修無証の者に飯すに如かず。」と引用される。飯＝供養は、千億の三世諸仏よりも一無念無住、無修無証の者に与えるほうがよいということである。これは現行の『四十二章經』に見えず。覺岸『釈氏稽古略』巻四（大正蔵 49.0881b）に『四十二章經』云として引用するものと一致する。

(三)『楞伽經』

『楞伽經』は⑩（五右）如海水（如海水因風波動、而水非動性。）に引用される。注釈では「大凡以動主静義論、則以風水喻為是是」として水風の比喩の部分が見られる。典拠は求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝經』巻1（大正蔵 16・484ab）、菩提流支訳『入楞伽經』巻1（大正蔵 16・515a）、実叉難陀訳『大乘入楞伽經』巻2（大正蔵 16・594b）である。

(四)『楞嚴經』

『楞嚴經』は⑩（五右）如海水（如海水因風波動、而水非動性。）に引用される。注釈では「以清濁義論、則以塵水喻為優」として塵水喩の比喩の部分が見られる。典拠は、般刺蜜帝訳『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經』巻5（大正蔵 19・126a）である。

(五)『円覚經』

『円覚經』は⑩（五右）如海水（如海水因風波動、而水非動性。）に引用される。注釈では「以清濁義論、則以塵水喩為優」として塵水喩の比喩の部分が見られる。典拠は、佛陀多羅訳『大方広円覚修多羅了義經』（大正蔵 17・913b）である。

五、原の著作

原の著作は『無明論』、『心識論』、『心性実験録』が引用される。

『無明論』は（弘化4年（1847）の作で『全集本』の pp.83-84 に収録される。『心識論』は原版と再版があり、原版は安政7年（1860）の作で『全集本』 pp.85-96 に、再版は明治2年の作で『全集本』 pp.85-96 に収録される。『心性実験録（又名西学弁解）』は明治6年の作で、『全集本』 pp.103-124 に収録される。

⑧（五丁左）不覚では、「夫れ蓋し不覚とは、色質蘊形の原酷なり。別処に論ずるが如し。」として『心識論』、『実験録』を挙げている。

⑩（四丁右）不生では、不生滅と生滅との和合の部分について、『再校心識論』（四丁之左）「譬真心如水無明如塵和名濁水也。」と述べている。『再校心識論』は全集本の89頁である。

⑬（四丁左）如菩薩の部分で「見性成仏の本義、『心識論』の末章、合せて看よ」とある。『心識論』の末章には「定慧堅明、能斷流入、則煩惱菩提、猶如昨夢也耳。」（96頁）とある。

⑳（六丁右）境界では、「又た末那十一種異名を説く。予、別に図解有り。『心性実験録』とある。これは『心性実験録』の「三心図解」（『全集本』 pp.108-109）を指すか。

㉔（七丁右）坦山「無明、心識の二論、宜く参考にすべし。且らく学道の容易ならざることを思え。」として『無明論』、『心識論』を示す。

六、不明

④⑤（十六丁右）千劫（修行諸行。経十千劫。信心成就。）に「百丈曰、「劫者滞也、亦住也。」とある。典拠をさぐると、『撫州曹山元証禪師語録』（大正蔵47・530a）がヒットする。

④⑨（二十四丁右）他方仏土（謂以專意念仏因縁。随願得生他方仏土。）に〔注釈〕李通玄曰、「機未成、則求淨刹於他方、根已熟、則顯法身於自性。」とあるが、未検である。

五、結語

本稿では原坦山の『大乘起信論』観を探るために、『両訳勝義』の標註に注目し分析を行った。明らかになったことを整理すると次のようである。

一、標註は五十箇所であり、引用なしと引用ありとに分けられた。

二、引用ありでは『釈摩訶衍論』の引用が最も多かった。その理由は、『釈摩訶衍論』は原の人体論に近いものがあると見たからであった。この原の『釈摩訶衍論』重視は、『釈摩訶衍論』の流通史の観点からも重要なことと考えられる。

三、その他の引用は、起信論関係では慧遠の注釈、明代正遠の注釈。また經典では『大日経』、『四十二章経』。禅関連文献では延寿『宗鏡録』、玄覚『証道歌』。華嚴関係文献では李通玄『新華嚴経論』。原の自著では『心識論』、同『心性実験録』が言及された。

今後は、『両訳勝義』の本文そのものの解析も行っていきたい。

<参考文献>

・一次文献

原坦山『大乘起信論両訳勝義』（仏仙社、1885年）

原坦山『大乘起信論両訳勝義講義』（万昌院功運寺、1988年）

・二次文献

柏木弘雄「大乘起信論を軸とした仏教研究の展望」（『駒沢大学仏教学部論集』22、1991年）

佐藤厚「原坦山の東京大学仏教学講義」（『駒沢大学仏教学部論集』54、2023年）

佐藤厚「翻刻・『高嶺君遺稿』「印度哲学」—原坦山の東京大学仏教学講義を知る糸口」（『中央学術研究所紀要』52、2023年）

〈キーワード〉原坦山、大乘起信論両訳勝義、釈摩訶衍論、仏教身体論、三心図解